

# 南島つれづれの記(その2) — 大津波でできた多良間島 ~

矢崎清貴 (燃料部)

## 大津波に関係する多良間島の発祥

宮古群島のなかでもっとも辺鄙な島は 多良間と水納島である。この二つの島で多良間村を形成している。この島は 宮古島と石垣島との ほぼ中間にある孤島で やや宮古島に近い。島は 東西 8km 南北 6km の楕円形で 珊瑚礁の干瀬にうちあげる白い波頭が 周辺の白い砂浜と 福木の濃い緑との配色にはえて エメラルドグリーン<sup>ミンナ</sup>の輪につつまれ まさに宝石のような島である。この美しい景観は 航空会社の観光用ポスターとしてよく空港でみうける。

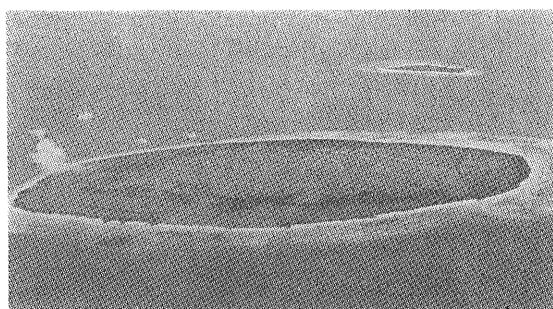
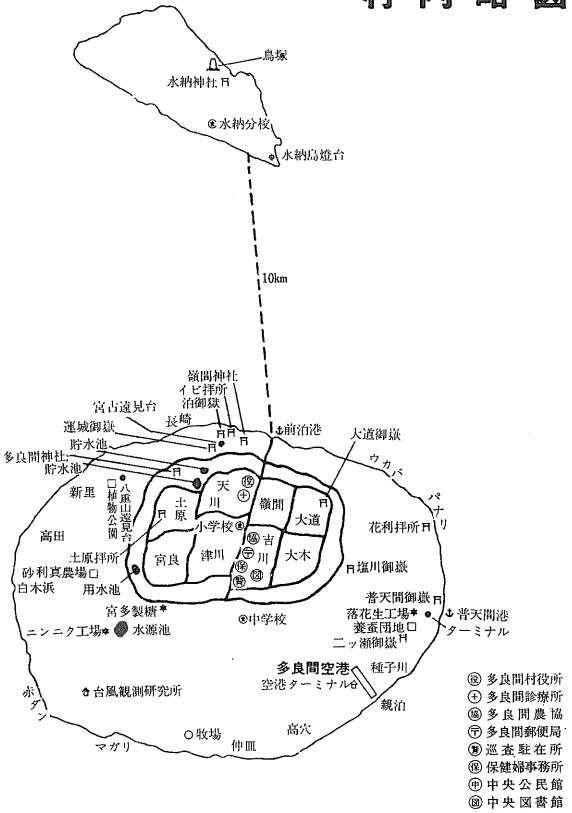
多良間島の北方 10km には 無人島化してゆく水納島がある。この島は 東西約 1.5km 南北約 700m の孤島で 多良間村の一つの字として現在にいたっているが 人口僅か 20名の過疎化のはげしい島である。とくにこの島は「百合若伝説」(尋常小学校二年生の教科書に出ていた)があることから有名で 多くの知名人が訪れている。

宮古の島々を訪れて久しいが これほど自然の豊かな島はないように思う。自然が一ぱいということは 逆に近代文化の手のとどかない僻地ということにつながるし 近代化の毒に染まっていないということになる。

このことが 過密化した近代文化に毒された都会人のオアシスとされつつある理由のように思える。 今年の夏この島ですごしたが その時同宿した航空会社の青年と話しをしてみた。 なんら観光資源のないこの島へどのような理由でくるのかと聞くと この青年は 学生時代に南西諸島の島々を「ヒッチ ハイク」してあるき その結果この島が一番好きになったという。 仕事の関係で 一週間ぐらいの休みがとれれば 直行便(もちろん

直行便はない 東京→那覇はジェット機 2時間30分・那覇→宮古はY S 11 60分・宮古→多良間小型機 20分 月・水・金運航)で来るといふ。この青年にとっては明日への活動の泉であり もっとも心身の休まる楽園の島なのである。別にこれという目的はもたずに ただ「ボケー」として時間を過ごせればよいようである。それにしても往復の航空賃が大変でしょうと聞くと 交通関係の職員と同じですよという。青年は旅が好きで 東南アジアの小島へよく旅をするそうだが この島のような安堵感にはなれないという。この島に 滅法ほれきっていて 1,800km の道のりを越えて会いに来た恋人のようにはしゃいでいる様子は 多いに考えさせられる。たしかに 都会の過密と雑踏のなかで 人間個々の本

## 村内略図



第1図 空からみた多良間島 北方に永納島が見える(永積安明氏の沖繩離島より)

第2図

- ① 多良間村役所
- ② 多良間診療所
- ③ 多良間農協
- ④ 多良間郵便局
- ⑤ 巡査駐在所
- ⑥ 保健婦事務所
- ⑦ 中央公民館
- ⑧ 中央図書館

性と斗いにつかれています人々の心をいやす島としては最適だと思ふ。多くの都会人(多くの青年)が人間の原点を求めて僻地へ旅をしているがその心の奥底にある一面をみたような思いがする。筆者自信も僅かな滞在期間であったが生涯をつうじての多くの感銘を受けたしいくつかの思い出が脳裏から消えることはないように思える。

「たらま」という名称は かなり古くから使われていたと思われるが その起源ははっきりしないようである。「李朝実録」1479年の漂流談記録に はじめて「他羅馬」という地名の島がのっている。このことからすでにそれ以前から「たまら」島の名称は 固定化していたもののように考えられる。現代使用されている多良間という字は 比較的現代になってからであって この漂流談記録には 他羅馬または達喇麻らが引用されており その後多羅馬をへて多良間となったようである。このようなことは 宮古島についても 古くは「密牙古」とされており 「みやこ」という語原はすでに1568年頃にあったことが文献にのっている。多良間島についての最初の文献は 前述した「李朝実録」である。この漂流記は 朝鮮人によるものであって 多良間での見聞記がのっている。それによると 「この島は平坦で山がなく 人家は50余戸 言語 飲食 民俗は大方与那国島と同様で 材木がなく西表島や伊良部島に取りに行く また昆虫には 蚊 ハエ ハブがいる」とされている。この漂流記以後の多良間島は 多くの苦難に直面している。なかでも人頭税という重税にたえ 島民の郷土への愛着と 隣人への共同作業という形式で 現在もとても美しい郷土を造り上げたのである。その一つは 耕地や防風林の計画的配置であり 多面的農業経営である。ある農家の老人は ここでの農業は 耕地開発よりも防風林との斗いであったが 現在の農家は 耕地開発に

専念して防風林まで破壊して利潤の追求をしているから そのうちに農業は だめになってしまうと ぼぼしていた。この島の緑の多いことは このように何世紀かにまつわる島民のたゆみない防風林への愛情が 宮古諸島のなかでもっとも樹木の多い 緑の島を造り上げたのである。

島の北西に標高32mの丘があつて 多良間島で一番高い丘陵がある。天気の良い日には かすかに石垣島の山がみえるという。その高台は 石垣遠見台と呼んで現在植物園兼公園になっている。同じ丘陵の東方には 宮古方面を監視する宮古遠見台がある。そのほかは 殆んど平坦で河川もなく砂質土壌によって被われている。

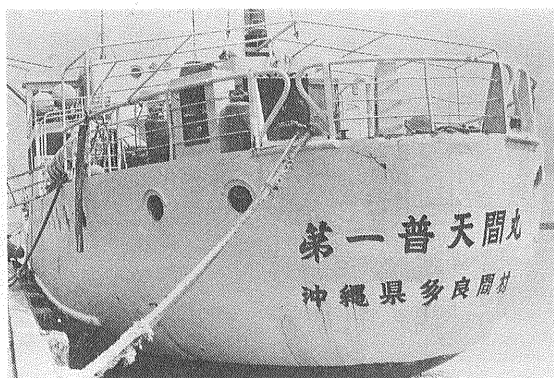
この島は 明治以前は宮古島にある下地村(現在の下地町)に属し 仲筋 塩川および水納字の3つの部落よりなっていた。この3つの部落には それぞれ目差(現在風に言えば町村の出先支所)があつて そこで行政がなされていた。明治維新後は改革されて 宮古島の平良村(現在平良市)に移され 大正2年2月に平良村より分村して はじめて多良間村としての自治が確立されている。

宮古の島々は全般を通じていえることだが標高が 低く 宮古島の野原岳<sup>ノボロダケ</sup>108mが高いほうで 多良間島 水納島らは低いグループに入る。このことに関係するの多良間島に住民が定着した時期は宮古島に比較して新しいようである。南西諸島の多くには 島の発祥についての伝説が多くある。多良間島に関する伝説は 宮古島周辺のものとかかなり異質なものである。

宮古島の場合は 天岩戸伝説や高天原伝説らによって構成されているが 多良間島の場合は 津波が発祥に関連して 伝説といっても史実に近い一面をもっている。「大昔 ふなぜーという兄妹があつた ある日畑



第3図 多良間島の村落



第4図 海洋博からの送りもの 従来は20~50トンの船が就航していたが海洋博のおかげで 多良間島へ廻ってきた300トンの船(片道 400円 3時間かかる)

に出て仕事をしていると 南の方から突然 大きな波がおしよせてきた。これを見た二人は あわててウイネーツツという丘にかけのぼり 波にさらわれようとするところをシュガリガギナ(チカラシバ)にしがみついでようやく難をのがれた。周囲を見ると 家や村も波にさらわれてしまって たすかったのは兄妹二人だけであった。そこで 二人は夫婦のちぎりを結び 村の再建をはかった。最初に生れたのは「ボウ」(へび)と「バカギサ」(とかげ)であった。次に「アズカリ」(シャコ貝)と「プー」(苧麻)を産み そのあとに人間が生まれた(村誌より)。このなかで 兄妹夫婦と最近に生まれる物については 宮古周辺の島と共通している点が多い。しかし 天岩戸伝説や高天原伝説のくんだりとは 明らかに異なり 東南アジア一帯に伝えられる洪水説の一つとみられる。そして 現実に明和大津波という史上四位の大きな被害をうけているだけに むしろ伝説というより 現実的な史実のように思える。

前にふれた兄妹のインセストは ホモ・サピエンスから現代社会を通じて タブーとされていたようであるが 宮古島ならびに多良間島の発祥には 兄妹のインセストが共通の伝説として残っていることに多くの疑問を抱く。

類人猿やニホンザルという単元の異なる社会でさえ 母と息子のインセストが多くの場合守られているといわれている。しかしこの社会は 配偶関係が多様性であることから厳密には断定できないが 概して好ましいこととされていないようである。

近代的思考方式で ものごとの起原を割り切ってしまうとするのは たいへん危険であるが 南島の多くにこのような伝説が共通して残っていることには 多くの興味がわく。

この美しい自然の島は ただ美しいという現代的な自然観の動機によって よみがえった島ではない。人頭税にはじまる 多くの苦しみのなかに内在した 悲慘な自己防衛への一つの代償として 現在の自然が満喫できることを銘記するとともに その苦難に内在する歴史に対して仁義をきることが 現在に生きるわれわれの責務のように思えてならない。

### 配所の雑居文化

ソテツやアダンの繁る白い砂浜の飛行場に立つ ここが多良間空港である。一週間に3日間開く空港である。「シマ・チャビ」(離島苦)と配所と伝説で有名な島である。

石灰岩をしきつめた白い道と 家の庭先に咲くプーゲンビリヤやハイビスカスの原色のコントラストが 遠い南の島へ来たことを認識させてくれる。長い滞在期間になると ハイビスカスは都会のネオンに見えたり 中年女性の色香を感じさせるが 不思議とプーゲンビリヤには 清純なナイーブな「みやらび」(女童)を感じる。

空港に降り立ったのはよいが 近代社会の代表的一面をもつ 「タクシー」が一台もないのである。「シマ・チャビ」の一回戦である。この島の情報は 再々の調査旅行で知っていたつもりであるが 車のことに関しては伊良部島にさえハイヤーがあることなので 当然この島にもハイヤーの2~3台はあるものと早合点をしたのである。同乗のお客さんは 地元の人なのか それとも知人なのか 何々農業と書いたトラックに分乗して去って行った。いよいよもって心細くなる。「シマ・チャビ」という現実に直面したことをあらためて認識する。それにしても 高密度過剰社会の一員として 何んら不自由のない都会から いいかえれば省力化され



第5図 石垣遠目台(積みあげてある石は全部石灰岩である)



第6図 遠目台よりみる 北西の樹海(わずかに山の稜相を示している)

た テクノロジとコンピュータライゼーションの進行している社会から 想像もしない次元の「トンネル」の入口にたっていることを意識せざるをえない。

重い荷物を持って てりかえしの強い白い道を宿舍まであるく決心をする。 4kmの道のりを部落まであるくということは 大変なアルバイトである。 しかし 幸いにも役場の若い青年に声をかけられ 覚悟の行進は救われた。 飛行場と部落への足の便は 平常だと役場にあるたった一台のバスが運行しているのであるが 筆者の着いた日には そのバスが故障して運行していなかったとのことであった。

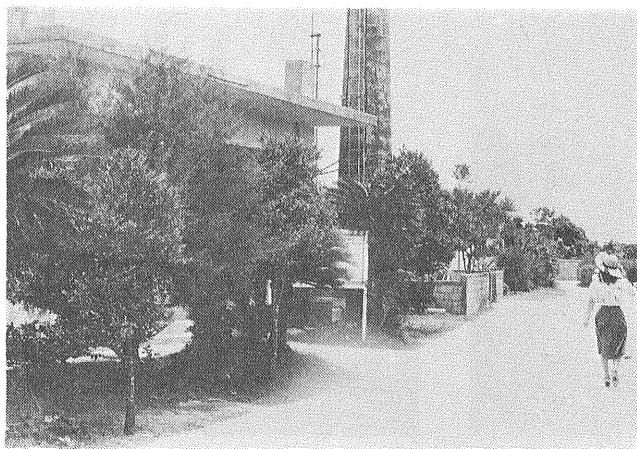
島一番の料理人のオカミサンのいる 八千代旅館に到着く 4.5畳の個室である。 島には 冷房を設備した宿がないことは知っていたが いざこの島へきて発電量の実情からみて当然のように思える。 学校の理科教材が電力不足によって実験出来ないという 現状ではとても冷房へ廻す余力はないのが当然である。 滞在中知っただが 冷房の入っているのは 郵便局の無線室と 診療所の2カ所だけなのであった。

個室といっても 三方は閉閉が自由の襖で仕切ってあって 都会人の概念では個室とはいえたものではない。 いわゆる 田の字型の家で よく田舎にある旧家の部屋と同じである。 部屋には 机と扇風機が置いてある。 筆者の前の部屋にも 横の部屋にも先客があるらしい 気をきかして襖を仕切る。 先客は 襖を平然と開いている。 明日からの作業の計画や 人夫の手配を役場において 空港から宿まで同乗してくれた青年に礼をのべて宿にかえる。 さすがに島一番の料理自満だけあって その日の夕食の料理にしたづつみをうつ。 東京の町で食べると 何千円かは取られるであろう。 それ

にしても 魚の生きのよいのと 量の多いのには驚いてしまう。 このような料理は 滞在中かわることなく連日の夕食が楽しく 多少の「シマ・チャビ」は料理のおかげで「イコール」になったように思う。 料理のことを書いたので ついでにのみ水のことを多少つけくわえておく。 宮古島は 地下水が豊富でのみ水にはことかかない。 しかし 水質は悪く長い期間の滞在となると まずい東京の水を送ってもらいたくなる。 多良間島や水納島の大部分は 現在でも天水を飲用している。 天水をのむということは 水に恵まれた本土の人々にとっては よほどのことがないかぎり考えられないことである。 したがって 天水の味を知っている人も多くはないであろうし 味のよいものだとは思わない人が多いと思う。 しかし 筆者の体験では 石灰岩のなかをぐってきた地下水より 天水の方が何倍かうまいのである。 そのことを理由づけるのか 多良間島の水道事業が水源は確保したものの このんで水道を引くことをしないとのことである。 とくに天水は 冷蔵庫に入れて多少冷やしてのむのが最高の味のように思う。 本土の農村地帯をあるくと 白壁の蔵の大小によってその家の資産がわかるというが この島では天水を貯めておくタンクの大小によって比較されるといわれている。

夕日が西へ沈むのは 時差の関係で遅く7時頃になる。 したがって 暗くなるのも 8時を過ぎてからである。 この時間帯は 長期間の滞在者にとっては習慣の上から手もちぶさたである。

9時ごろ「オカミサン」が床を取りに来てくれる。 蒲団は 何にするかという 突然不躰な質問に会う 都会から来た人は 蒲団のほうが良いという。 筆者は西南日本での生活も多少経験があるので 「コザ」でよい



第7図 多良間島の中樞部 役場・農協・郵便局その他の出先官庁の機関がある。



第8図 部落の道路 樹木が多いことがわかる。

ですと答えると 不思議な顔をする。

単元の異なる文化圏での夏の一夜は 長いものであり 個室文化とか 雑居文化とかの比較や思想的な論理でわり切れたりするものではない。連日30度を下ることの知らない温度計の中で 24時間を過ごすということは 並大ていなことではない。たった一つの涼を求める扇風機さえ 何ら役にたたないに等しい。とくに密封された個室とは いかにかしいものか経験してはじめてわかる。たとえ 権力や金権や知名度の高い低いという尺度のなかでも とっさに解決できるものではない。

しかし この問題を解決することは簡易なことである。個室から雑居へ逆行すればよいのである。ようするに個人の「プライバシー」の主張をやめることである。

それにしても 密封していた部屋を開放することは 千金にも万金にも相当する。外気の涼しい浜風が 暑くこもった空気を外へ追い出し 新鮮な涼風と置きかえてくれる。東京では よく扇風機をつけばなしにしてねむると死んでしまうというし 事実そのような記事が目にとまる。しかし 筆者のここでの体験では 別に異状がなく ごくあたりまえで 前の部屋の先生も 横隣の2人の女性客も同じである。その理由としては 夜風といっても おそらく体温に等しい温度ではないかと思う。したがって 異状が起らないもののように考えられる。それにしても 未知の女性の寝姿を公然とながめられることは 雑居文化からの贈りものと大いに敬服する。

日中のつかれもあって 開放された部屋でのねむりは心地よいものである。柳田国男がいうように『昔は夜は危険なとき 眠りこけない工夫をしていたらしいからこれは名残りともいえるが それよりも 部屋の構造が

あけっひろげて 鍵のかかる個室でないため 熟睡ができないのだという』。しかし 多良間島のような小島になれば よそのものが何人滞在しようと 警察統計が示すように 年に1回程度の事件ぐらいしかないことからみて 外敵を意識することも必要としないし せいぜい他人様の寝姿や 自分自身の寝姿を他人様へ公開することであって かえって親しみがわき話題がゆたかになる。

福木の厚い(ゴムの葉に似ている)葉が 何んとなく 活気がなく感ずるだけ 日の出前の気温は下るのかも知れない。島全体が緑に被われ 部落内に入るほど密となる。とくに屋敷垣に植えた福木が多い。この福木の木垣は 台風のときは防風の役目をはたし 夏の暑い日には影をつくり涼風を呼んでくれる。宮古島の裸にひとしい島々を訪ずれていた筆者にとっては 緑の濃いこ島にひとしれず愛着を感じるとともに羨ましく かつ島の絶へ間ない郷土愛に心うたれる。

夏の夜を一世紀逆行したような感覚のなかで過ごし 都市で失われていった暗闇のなかに立つ時 満天下に輝く星の美しさはまた格別である。この島には 人間のうしなつた暗闇があるし 心ゆたかな沈黙と ゆたかな生命の泉をつくりだす瞑想への時間帯があるのである。

よるも11時頃になると 島も寝しずまるのか 床のなかで聞く潮騒は幼いころの夢をかきたて 古き時代の人間味豊かな感情にしたる。暗闇とは反対に島の月の美しさは 一点の濁りのない真空のような空にはえて芽える。どこからともなく流れてくる蛇三線の音色はその昔幾多有為の人物が配所の月で涙をしばり 恨みを呑みながら多良間の土と化した人々への葬送曲として 耳のなかにくいこんでくる。



第9図 1857年 オランダ商船多良間島高田沖のリーフに座礁遭難した現場



第10図 島の西南方アカタニ原野にそびえる台風観測所のアンテナ



第11図 野性の山羊が飛び出てきそうな原野

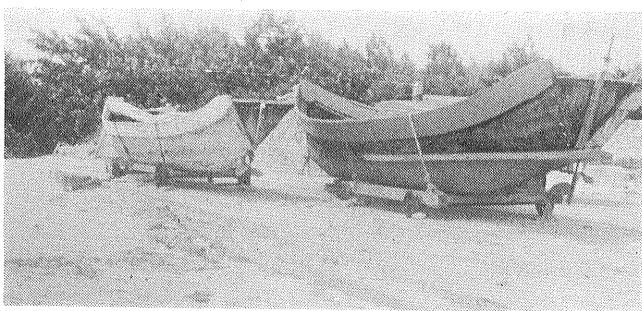
この島は 琉球の政治犯人が流された所だけに 多分に武士的な気風と 高度の文化が残こされている。なかでも 「忠臣仲宗根豊見親」の組踊りは有名である。この踊りは もともと首里から流人たちによって媒介された 伝統的な原形をたもち今日までうけつがれている。このほかに 多良間のキバツな豊年祭りが有名である。

よく野外をあるいていると 小 中学の生徒から「今日は」とか「お早よう御座います」と声をかけられ 余りにも突然のことで当方が返事に困ることがあった。生徒らにしてみれば日常なことなので ごく自然に出来るようであるが 当方としては準備がないので 大いに失礼をしたと思っている。しかし よく考えてみると 本土の田舎でも 四・五年前はよく見うけた風潮であったが 最近はずいぶん見ることがない。このような習慣の善悪についていうのではないが その根底にある やさしい心根に有難いとともに 先生方のす顔をみせていただいたような気がする。

### 「イーストマン」と竜巻

多良間島と水納島との間には 幅 10km の海峡がよこたわっている。この幅 10km の海峡は 遠い近いという問題ではなく 異質な文化というのか 時限の異なる社会を形成している。島に 1 歩上陸してみると 寂寞とした空虚な空間が展開し まさに沈黙の春というのか 音のない四次元への「タイムトンネル」が この海峡である。

宮古島の離島の多くには 船着場(機橋)がなく 離島への旅は潮の干満に支配されてしまう。現地の人々のことばによると 「時間がない」という。10km の海峡をへだてている 水納島への船も同じである。とくに 1961年集団移住(宮古島大野越)が行なわれてから 無人島化してゆく水納島へは 勿論通船もなく 用船するほかには島への道はない。朝 7 時の約束で水納



第12図 ナポレオンに勇敢なる男だといわれた原形を保つ「サバニ」貧弱な小舟である。

島に渡る。朝の 7 時といっても 東京の 5 時 30 分ぐらいに相当するの か あたりは薄暗い。東京と宮古島では 時差が 1 時間 15 分だということであるから それよりさらに 10 分ぐらいはうわのせすると 約 1 時間 30 分の時差になる。したがって まだ薄暗く夜空にはまだ明けの明星が美しく光っている。風が強くなるのか 夏雲が尾を引いている。

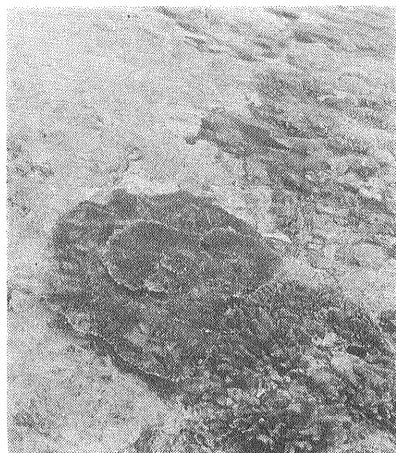
浜(前泊)におりゆくと 船頭はすでに準備に取りかかっている。1 トンにみえない「サバニ」(クリ船)はすでに「エンジン」をかけて調子をみている。こんな小船で未知の海峡をわたるのは 動揺と不安を抱く。機橋から見る水納島は 僅かにかすんで見え 海もおだやかで三角波もみえない。初日としては まずまず快調なすべりだしで安堵する。宮古島の離島でも 大神島へはサバニで渡った思い出がある。その時は 乗船者も多く そのうえ船は陸地沿ひにはしることもあってここでのサバニとは感覚的に大きなちがいを感ずる。乗船者は 良三さんと筆者の 2 人だけだし 陸地を遠く離れた流れの早い外洋を 小 1 時間もゆられることは 自他ともに船に強い自信を持っていても 未知ということもあってなんとなく気がせく。良三さん 外洋でエンジンが止まったらどうするか と聞くと 流れにまかせると いうどこまで流れて行くのかと聞くと 今日風の風と流れでは中国大陸だろうという。生命をあずかる船だから よく検査してあるから心配無用だという。それにこの船は一見古く見えるが エンジンは船の割合に馬力が大きく 新品だから心配しなくてもよいという。それより水納島には 機橋も突提もないから 海岸近くにサバニを着けてからは浅い水の中を潮の関係では かなり長い距離を ざぶざぶあるかなければならないから 準備をしておけよ それに海峡では 潮をかぶるから 雨具を着用しろという。こんなに「ナイ」でいるのに 雨具が必要かねとたずねると 外洋へ出るとおもったより波が高いし 流れが早いから潮をもろにかぶるとい

でも今日は すばらしい天気だから楽に渡れると思っていたよと反答すると 良三さんは 余りよい顔をしない。それは 後でわかったことだが 筆者が考えたように よい天気だと思っていならしく不機嫌な顔をしている。どのような理由で不機嫌顔をするのか この時点ではかいもく見当がつかなかった。しかし船頭の慣というのか その時すでに帰路の天気を想像していたかのように思える。

「サバニ」は 浜を離れ礁湖の中を進む 薄暗い海は油を流したように静かで エンジンの音のみ耳に心地よくひびく 礁縁を境にして 船は左右にゆれだす こんなはずではない 沖を見ると白波も見えるし 余りにも外ずらと内ずらの変化のはげしさに驚く。

この海峡の恐しさは 土地の人々がいう通り けっしてなまやさしい海峡ではないことが 渡ってみて初めて実感としてうけとめることができる。船のゆれは 海峡の中心よりやや水納島近くで もっともはげしく お陰で全身ずぶぬれとなる。それにしても 「サバニ」という船は潮をかぶるものだと つくづく思う。しかし これだけ流れの早い海峡では 当然のことかも知れない。「サバニ」は 瀬戸内海や内海の洋上を走ることとは本質的に異なり あくまでも外洋である以上 潮をかぶるだけ流れを 波を切って進んでいるということにもなる。この「サバニ」は 南西諸島漁民の長い期間の海への挑戦の結果考案されたもので 多くのすぐれた面を持っているとのことである。とくに 糸満漁法と「サバニ」はきってもきれない船であり 「サバニ」と糸満漁夫にかんしては 面白い話がある。

船頭の宮国良三さんは 沖縄本島の糸満出身である。いわゆるイトマナー（糸満漁夫）で知られた 伝統の糸



第13図 ラグーンの中のサンゴ

満漁法をマスターした船頭であり漁夫である。かつては糸満の漁師たちは 「サバニ」を漕いで大平洋からインド洋を越えて地中海まで出かけたらしく 「ナポレオン」と糸満漁夫との出会いがまことしやかに語られている。それによると 昔 「ナポレオン」が「エジプト」に遠征したときのこと 地中海を航行中の「サバニ」を見つけた。「ナポレオン」は早速部下に あんな小さな船で海を渡っている者は何やっだと たずねた。部下たちがしらべると それは糸満から来た漁夫たちであったから 「あれなる勇敢な男たちは「イースマン（東洋人）でございます」と答えた。それ以来 糸満漁夫のこと「イーストマン」と呼び 勇敢であることの象徴となったという。この話しは 観光ガイドから聞いたものであるが 怒濤逆まく外洋の海を 丸太を刳り抜いただけの貧弱な小船で 漁をする海の男たちの実態がそこにみごとにあらわれているのではあるまいか。まったくのしくなる話だが 一面では真実を語っていると思う。このことは その日の帰りにいやというほどに見せつけられた。お陰で 今日 このように現存するのも良三さんのお陰と感謝し「イーストマン」の実力に敬意を表したい。何事が起ったかという海上で竜巻に追われ 紙一重で生命を維持できたからである。時間でおよそ 10分引き上げをずらしていれば もろに竜巻の巻ぞえをうけていたように思う。海峡の中間付近から 天は一転にわかにかき曇り 豆つぶ大のスクールになる。船は4m内外の波頭を付けて進む。二階から船もろとも波の谷へたたくつけられる 己れの身体が船外へ飛ばされないように船体一部に抱きつく 雨がどうの 気分がどうのという暇はない ただ一すじに安全に多良間島へつくことを願う。良三さんも 船尾にすわりこみ必死になって 波の様子をみて船を進めている。怒濤逆まく海峡で 竜巻に追われて船をあやっていると 本人も感じていない やはり夢中で操作をしているのである。前泊の「ラグーン」に入って はじめて竜巻に追われていたことがわかる。それにしても 竜巻というものを目のあたりにみて その巨大なげ物の全貌を知ったような気がする。浜に上り 水納島を見ると 夏の太陽がサンサンと照り のどかな島が虹の中に浮かんでいる。

何事もなかったのである。我々を追って来た竜巻は海峡の水納島よりを ゆっくり依然として東進を続けている。竜巻の幅は せいぜい100~200m規模のもので 上空へは おそらく1km 弱のうす暗い円柱型の昇竜のような煙突(径20~50m)が うねりながら上昇している。海面は盛り30~40mの高さまで潮を吹き上げて

いる。生れて初めて竜巻という怪物に遭遇して 今更のごとく「イーストマン」の慣と「イトマナー」の技量に多くの賛美を送りたい。良三さん 海上でこのような竜巻に遭遇したら どうするのかねと聞くと「ナタ」を持って竜巻の中心へ切り込むことだという。迷信と思うが「イトマナー」の勇敢な一面がうかがわれる。宮古島で作業をともにした 安田さんがよく竜巻の恐ろしい話を聞かしてくれた。それによると 竜巻の襲った跡の惨状は 動物の肉が散在して みるに耐えないという。そして 何故に骨が行くえ不明になるのか合点がゆかないという。

途中 何度も船を引返してほしいと念じたが 船頭の真剣な顔を見ると それも言えず ただ一すじに安全航海を神に祈り船べりを強く握りしめて 自分の身体を固定するだけにやっきになっていた。沖離の離島には安全航海を神に願う風習があって いたる処に祠があることもうなずける。水納島の陸地にも 小さな祠があって「イビ」と「パナ」と呼んでいる。ここでは航海安全や旅先の幸を祈願する。しかし 一般には海の神は「トブリ」の神と呼ばい 海の幸や漁撈中の無事を願う神としてまつられたもので 行事としては「イムウプナカ」がある。水納島の陸地の祠には 上陸すると先ず最初泡盛を献上し 無事に航海が出来たことを神に感謝することが一つの行事とされている。

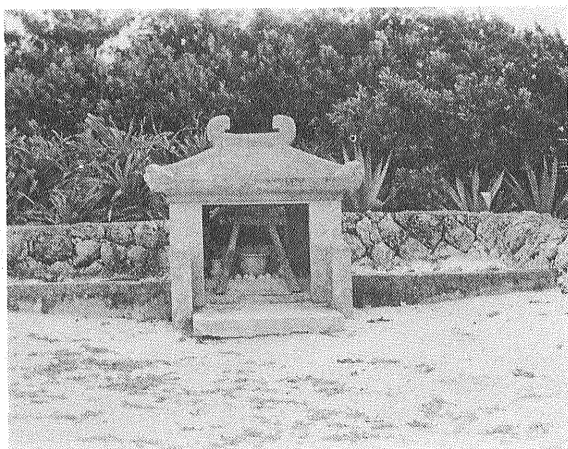
船は 海岸より200m 手前でエンジンを止めて サンゴ礁の暗礁の中に水路を求めて竿で岸へ近づける。良三さんは これ以上は無理だといって 海の中に入る。まだ 海岸までは100m 近くある。ずぶぬれの身体で海に入ることは余気にはならない。どの道同じであるからである。早朝の海は かえって気分爽快である。

ただ 100m 近いサンゴ礁のなかをあるくことは 時間がかかることを 筆者は八重瀬瀬のフデ石で約1km を3時間かかった経験があることから 多少うんざりする。上陸だけを目的とする直行型の心情であれば 100mの海の中をあるくことはいともないことである。しかし 生きている「サンゴ礁」が気の毒に思えて なかなか決断がつかない。とくに朝日にはえる ラングーンの中にサンゴ礁は直射日光の屈折に対話するごとく また特別な情感にしたるだけの充分な魅力がある。その「サンゴ礁」に 足場を求めてあるくことは 並大抵ではない。とくに 樹状の「てーぷるさんご」や「アナクロポラ・フォルベシ」は 要注意である。したがって なるべく安定のよい 足をのせてもいたまない「はまさんご」らの平坦面を求めて一歩一歩進むことになる。美しい「サンゴ礁」の海や 多くの石灰岩の露岩地域を持つ 宮古群島の調査活動には 「ゴツイ」登山靴やキャラバンシューズよりも軽くて柔らかい地下足袋が 非常に都合がよい。とくに海の中や石灰岩地帯をあるくには サンゴ礁をいためないし 岩角に靴紐を引かけて転倒することもなく 野外にも地下足袋の底を貫くほどの竹藪もないし 「ハブ」もないことから 地下足袋に賛辞をする。何はともあれ 目的の島水納島の白砂に一歩を記することの出来たことに感謝する。

よく繁った福木(丈10m 内外)の林の中に 北にのびる一本の道が開けている。この道は R. CARSON の“Silent Sprig”へ道でもある 人影も そして音のない現実が眼底に展開してくる。筆者の人生という歴史のなかで これほど動のない空間を物心ついて知り得たこともない。勿論この島には 自転車も自動車もない。動くものは分校にある船だけであるという。生徒4名 先生3名の小学校が この島のただ一つの情報交換の場



第14図 海の中をあるいて地質調査をしている筆者



第15図 水納島の陸地の前にあるイビの拝殿 航海安全を祈る



であり 役場の出先でもある。島はほとんど平坦で周辺至る処に福木や松の木の林が見える。まさにゴルフ場のコースのような感じが強い。山地といえるものは島の東方にある水納島燈台付近はわずかにその様相を呈している。しかし標高は8m弱である。人口僅か20名のこの島には耕地といえる場所はほとんどなく分校付近に僅かにラテライト質土壌が残っている。

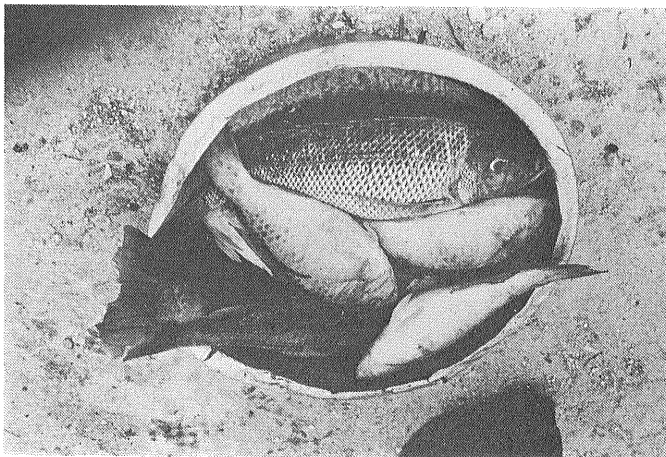
多くの若者は環境の破壊と人心の荒廃との只中であってまことの豊かさを求めてインドへ赴く。巡礼と托鉢と瞑想と いっさいの制作 いっさいの暴力を放棄した世界 採集文化の世界にまことの豊かさと生命のいずみを求めている。この水納島にも若い青年3名が約3か月間島民の1人として生活し島の記録をとどめたという話を紙上で見たことがある。残念ながらその内容については見る事が出来なかった。しかしこの島での3カ月はおそらく長く感じたであろうし生涯を通じての「島の記録」が彼ら若者の記録として生きていくように思える。

### 野性化した山羊の群れ

多良間島の海岸をあるいているとき山羊の大群の出会うおそらく20頭内外はいたように思う。野性の山羊の話は宮古本島でも以前はよく聞いたし中味という沖縄料理にも何回かありついた思い出がある。しかし水納島の山羊の群れにはいささか驚かされる。

おそらく100頭内外という数になるものと思う。この大量の山羊の群れは住民の大部が宮古島へ集団移住した時期にさかのぼる。移住にともない多少の家畜が放置されそれが今日のように数を増し耕地を荒し廻っているものと思うと関係者が話している。頭数などは何頭いるのか皆目見当がついていない。ある

人に聞くと何千というし何百ともいわれている。しかし水納島2.2km<sup>2</sup>の土地は何千と数には対応出来ないであろう。よって多く推察しても百頭ということになるだろうが筆者の感では百頭以内のように思える。家畜としての山羊は女性的な「イメージ」を受ける動物であるが野性化した山羊は兇徒的な威圧を感じる。一つの群れは20頭内外のように見える。それがいくつかの群れに別れて住んでいるようである。よく聞く動物社会は知力と力量の社会と呼ばれているが野性化した山羊の社会もそれを忠実に実行しているようにみえる。ボスはかなりの古老であってもっともよい場所に居をかまえて大ボス中ボス小ボスらをしたがえているのか1号2号3号をしたがえているのかそのへんのことは皆目見当がつかないが、一つの群の中枢部を形成しているようである。その外側には小山羊の群れが出来ておりさらにその外側には城壁の役目とアンテナの役目をつとめるために活動的な中堅級の山羊の群れが取り巻いている。何か異状が発生すると中堅級の山羊が中枢部に報告してボスのお出ましとなる。ボスはアンテナの位置まで来て異状が何事であるかを確認してその時の状況によって行動に移るようである。筆者が遭遇したボスは中枢部の大形の山羊を前面にして前方への果敢な攻撃をかけてくる「ゼエスチャー」をしきりにやってくれる。その間に小羊を遠くへ逃がしているのである。それにしても山羊という一般的にうけとめている概念とこの島でみる野性化された山羊とのあいだには大きな認識的な「ギャップ」があった。沖縄料理の代表的な山羊料理が現在山羊不足でなかなか手に入らないしかりに手に入っても高価なものになっていて庶民の口には入らない。島



第16図 山羊の肉より魚の方が手とりばやい(くろだい)



第17図 水納島の鳥塚

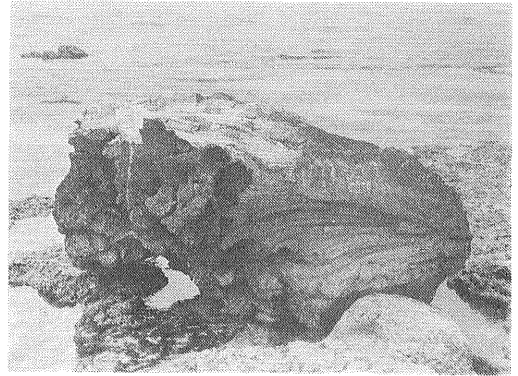
を案内してくれた船頭の良三さんの義父は 山羊を取ってたべなさいという。しかし 野性化した山羊を取るのは大変なことであるそうである。ハンターにたのんでもなかなかとれないし そこで考えたのが 漁網を山羊の通路に張り 空罐をたたき網へ追いこむのである。しかし 水納島のように過疎の島では 追い込みの人足が充分ではないし 山羊を殺してまで動物性蛋白を必要としない。動物性蛋白が必要ならば 浜におりればよい 水深 30cm 位の処まで 体長 60cm くらいの魚がゆうゆうと泳いでいる。多良間島の普天満港付近の調査をしている時 海辺で オヤジさんとオカミさんが 20m位の網を張り 2人で魚を追いこんでいる。筆者にむかって君も一しょにやらないかという。しかし 胸まで海に入っていて さかな追いをすることもないので ことわると 2人で追っついては 逃げるのが多くてだめだという。山羊の追込みも 追手の人数がものをいうことは勿論であるが 魚よりかんのよい山羊をしとめることは大変なことである。

山羊の群の構造は いわゆる重層構造のようにみえるが 「ボス」がオスであるように見うけることから 家父長的なような群れに思える。「ニホンザル」のように テリトリーをかまえおらず 一つの地域共同体一同種の種個体から成りたったコミュニティーをつくっているようである。そうでもしないと 百頭内外の山羊が群れごとにテリトリーをかまえられては 生きて行ける空間が余りに狭小なのである。このように 家畜化されていた親より生れた山羊が 年代とともに野性化してゆく傾向では 類人猿の群れからニホンザルの群れへの逆行的な社会機構があるのか 山羊から類人猿社会への模索があるのか 多くの 興味がわく。

### 鳥塚の石と百合若物語

水納島の調査は 水納島の古老宮国仙助氏の協力をえた 仙助さんは 百合若の伝承者としてしばしば雑誌や単行本に名前がでてくる。百合若の伝説を ここでとり上げると非常に長くなるので その概要を記しておく。百合若伝説は 大正年代に生まれた人々には尋常小学校二年生の教科書で習った覚えがあると思う。

「百合若の住んでおった島や土地は 不明であるが 侍であり その地方では身分が高く かつ剛力であって すべてのもが特別あつらいのもでなければ使用出来なかった そのようなこともあって偉人として崇められていた。百合若は豪傑である反面 一度起きると七昼夜起きていて 次の七昼夜ねむむという性質があつてこの性格を逆用されて 海に流され目がさめたのが水納島の海であつたという。島は無人島で 百合若は水や食



第18図 海岸に打ち上げられる石灰藁(径2mもある) このような石灰藁が鳥塚の石に使用されている。

い物に困つたらしい。それでも 貝がらを利用して天水を集め 六尺の剣が五寸になるほど 貝類を掘り食事にしていたという。ある日突然 自分が飼つておった愛鳥が飛んできて その足にくくりつけてある自分の愛妻からの便りをうけとる 百合若は 自分の血で返事をかいて 鳥にたくしたのである。それからは 絶えずこの鳥が行き来をして 軽い食物などをはこんできたという。それが 当然来る予定の日になつても 鳥の姿が見えない 翌朝浜辺をみると待ちわびた愛鳥が流れついて 息絶えていたという。百合若は 愛鳥の亡骸を丁重に葬り そこに塚を立ていつもお参りをして 悲しんだということである。(それが現在水納島の鳥塚として残っている)。百合若は 小舟にたすけられ 自分を海へ流した相手を殺し ハッピーエンドになるという」すじ書が百合若大臣の伝承である。

この鳥塚は 水納島の数少ない名所の一つにかぞえられている。その塚は 部落からほど遠くない野辺のアドンと松と福木の森の中に淋しく立っている。墓の形は ごく一般に本土で見うける墓石と同じ恰好をしている。その墓の側には厚さ20cm 幅50cm 長さ60cmたらずの旧墓石の破片とおぼしきものが残っている。もとは 180cm位の高さをもつた大きなものであつたというが 恐らく暴風のため倒壊したものを 心ある人が再建したものであろう。現在の鳥塚は 文字は一字も読むことが出来ないし はたして字が「キザマ」れていたのかわからない。塚の比較的下位に波形の模様 3~5本集中しているだけで 字らしきものがみとめられない。それにしても かくのごとく立派にそれを再建した人の心の奥床しさがうかがわれる。墓前には 島の習慣にならつて供物の縄が捧げられている。

宮古の島々では 鷹は島の生活における子供たちの大

きな思い出の一つである。鷹にまつわる童話 童謡も数多くある。とくに 多良間島には「タカトイ」（鷹とりの意である）といって 10月頃「サシバ」（鷹の一種）の群れがわたってきて 夕方になると海岸近くのヤラブ（福木）などに下り 羽をやすめる これをねらってとるのである。林の中の「サシバ」がとまりそうな木をえらんで とまり木をわたし 下方の枝を利用してかくれ小屋をつくる。

いっぽう細竹の先に「スニ」（クログ）の葉の骨でつくった「ワナ」をつけ これを小屋の中からとまり木のところに出しておく 「サシバ」がとまり木にとまると 小屋の中から細竹を移動させ 「サシバ」の首にナワをかけてぐいと引ばると サシバは首をしめられ 落ちてくる。これを とらえてヒモで羽や足をしばりつけ 細竹はふたたびとまり木のところに出しておく。こうして 多いときは 10羽以上もとれるとのことである。

この頃になると 古くは子供達が 「たかごう」の歌をうたったという。

歌 詞	意 訳
たかごー	たかよ
んにごー	鷹の群れよ
舞いまい	舞え舞え
ばがむてどー	みんな俺のものだ
ヤーニヌチャム	（囃子）
クムイヌチャム	（囃子）
うわがやーや	おまえの家は
いだが	とこだ

多良間ぬ	多良間の
ばいばたぬ	南の方の
ゆすきーぬ	薄の
み〜んど	中に
巣やつふい	巣をつくり
びーうい	住んでいるのだ
びーうい	坐っているのだ

（多良間村誌より）

以上は子供の年中行事の一コマのスナップである。「サシバ」のとりかたと 子供らの「たかごう」にまつわるわらべ歌であるが何んともいえない 自然への純朴な心情と自然に対する情感がうかがわれる。

とくに「サシバ」の群れは 人口の少ない 水納島に多く翼を休めて シベリヤや 南洋の島々へわたっていたものであろう。群れをなして渡る鷹のうちには 老衰したものや 病弱のもいて 憐れな姿を浜辺にさらすことも少なくなかったであろう。そして 子供達の年中行事となっている「タカトイ」の犠牲となってゆく多くの鷹に 何人も一掬の涙をながしたものであろう。

そのことが 水納島の鷹の墓（鳥塚）となり 島人が鷹への供養として建てられたもので その動機がかならずしも百合若伝説と結びつきはないように思える。もっとも百合若は 九州豊後が故郷ということになっていることから 地理的にも 海流の流れからみても かなり故意的な結びつきが考えられる。それにしても 鳥塚と百合若伝説を結びつけた演出家の造詣の深さを感じている。この百合若伝説は 九州と水納島だけであって沖縄本島や宮古島にはない。

仙助さんに案内していただき つぶさに鳥塚をみる事が出来た。仙助さんは 彼なりに鳥塚の石を筆者に同定してもらいたいという野心もあったようである。案のじょう 鳥塚の石は どの石かという質問になる。一見したところ 石垣島の片岩か あるいは安山岩類かなと思う。いずれにせよ 割ってみないと観別出来ないという と 持ってみたらという 背丈70cm内外の長方形の塚石を持ち上げると 軽がると持ちあげられる。まさに浮石同様で みた目は「コケ」むして字も判読できないほど古い感じをうけるが 実際はとんでもない「イカサマ」石である。これでは 風速何10mという台風がくれば どこかへ飛んで行くこともなっとくがゆく。それにつけても 180cm の石柱を かりに石垣島から運搬して来ても 突堤も棧橋もないこの島へ陸揚げすることは 容易ではない。それが 何世紀か前のこととなればなおさら困難なことである。筆者のうかつさに気がつく。鳥塚には申訳がないが 倒してよくみると 何んのことはない現在も多くの海岸に打上げられている「石灰藻」の一部分で 現生のものである。なるほど これでは「ケズリハンマー」一つで石柱をつくるのもぞうさがないし 「コケ」むすのも余り時間を必要としない。石柱の比較的下部に見られた波形の模様は 「石灰藻」それ自体のものであり 字は消えたというのが最初から「キザン」でないように思える。

島を離れる時仙助さんは 本土で問題になっている原子力船「むつ」でも 発電所でも 石油コンビナートでもよい 本土でじゃまになる企業は何んでもよいから この島へ来てほしいと筆者にいわれた。あと2年でこの島は 自動的に無人島になりますといわれた知念先生も 自分の生まれ育った島に対して多くの感慨こめての言葉が いつまでも筆者の心のどこかにしみついている。

鳥塚と百合若伝説が どのような動機によって結びついたか その背景には故意的な一面もあるように思えるが 沈黙した平和の小島にふさわしい伝説であり すえ長く伝えてほしいものである。